

2019年度第2回フィールドサイエンス・コロキウム・社会性科研共催研究会

「サルを見るようにヒトを見る」

1. 著作権保護のための表示

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

2. 研究会基本情報

日時：2020年3月7日（土） 14:00～18:00

場所：AA研マルチメディア会議室（3階304室）

司会：河合文（AA研）・外川昌彦（AA研）

挨拶：河合香吏（AA研）

趣旨説明：大村敬一（放送大学）

発表者：

- 1) 近藤祉秋（北海道大学）

ともに独りで歩くこと：北方アサバスカンの社会性と自律性

- 2) 森下翔（大阪大学）

観測する科学者を観測する：「ヒトを見ないようにヒトを見ること」と「サルを見るようにヒトを見る」こと

コメンテーター：

- 1) 黒田末寿（滋賀県立大学）

- 2) 上野将敬（大阪大学）

3. 内容

3-1) ともに独りで歩くこと：北方アサバスカンの社会性と自律性（近藤祉秋）

本発表では、北米先住民における社会性の議論を踏まえながら、内陸アラスカ先住民社会における「人同士の社会性」と「人と動物の間の社会性」を論じた。北米先住民研究では、これまで「社会性」概念を人間同士の関係に限定せずに、人と動物との関係においても適用することの重要性が指摘されてきた。その際、「善き猟師のためにみずからの命をささげる動物」という現地の言説に注目する議論が展開されてきたが、ジョン・ナイトはこの議論を「狩猟＝シェアリング」論とまとめた上で批判的に検討した。彼によれば、これらの事例で論じられてきた動物の「社会性」とされるものは、動物種を管理する精霊との間の互酬的關係と捉えるべきものであり、狩猟民と動物は（牧畜民と比べて）個体と個体の継続的な関係

性を持ちづらい生業形態をしている。上のような見解に基づき、ナイトは、狩猟民の事例から人と動物の間の「社会性」を論じるのは早計であると批判した。しかし、一見とても堅実なナイトの「狩猟＝シェアリング」論の批判は、あくまでも先行研究の文献読解から生まれたものであり、現地調査に基づいた主張ではない。

そこで本発表では、個体と個体の相互作用に着目する視点を発展させ、自分自身の身体を実験台として、調査の過程で調査者が経験した相互作用を出発点とする研究方法を採用した。とりわけ森の中での歩き方や振る舞いかたなどを含む身体動作をいかに人々の間で、および森の中に住まうさまざまな存在を念頭に置きながら調整しているかをトレイル作業、ベリー摘み、水鳥猟の事例から論じた。

ナイトの批判は「狩猟者と獲物の一回的な関係」／「狩猟者と精霊（種霊）の継続的な関係」を前提としていたが、本発表では狩猟採集民と動物の社会性を考える際に「狩猟者と獲物（種霊）」の関係だけに着目するのではなく、獲物の位置を教えてくれるとされるワタリガラスのような獲物以外の生き物との関わりも視野に入れて「社会性」を論じる必要があると指摘した。加えて、発表者は人類学的な現地調査において、現地での活動に参与（観察）する中で調査者が繰り返す「失敗」を彼らの身体感覚に近づくための手がかりとすることが有効なのではないかと問題提起をおこない、北方アサバスカンの社会性を「それぞれの自律性を最大限に尊重し、発揮するための個体間の連携」という意味での「ともに独りで歩くこと」だと特徴づけた。なお、発表では、人とワタリガラスとの音声的な相互作用の事例にも触れたが、今後、鳥類社会学的な研究の方向性も検討している。

3-2) 観測する科学者を観測する：「ヒトを見ないようにヒトを見ること」と「サルを見るようにヒトを見る」こと（森下翔）

ヒトが本来的に「他個体とともにある存在」であるとするならば、科学者に代表される「ひとりでものを考える」という奇妙な存在様態が、どのようにして生まれ、またなぜそのような存在が可能なのか。本発表はこの問いについて、「ひとりでものを考える存在」であることを規範とする科学者共同体の観察をつうじて検討するものである。科学者は「ひとりで考える」ことを善いことであるとしながらも、実際にはほとんどの活動を「ひとりでやること」はできない。筆者が参与観察した科学者の観測現場では、積極的に社会関係の構築作業を行いながら、しかしそれを観測の「フォーマルな」目的として掲げない科学者の在り方が観察された。すなわち、科学者は科学者どうしの関係構築を行いながら、これをインフォーマルなものとして扱うことで、フォーマルな領域では自らを「独力でものを考える存在」であるかのように提示する。そのような条件下では、人類学者が科学者の報告において記述されないような「科学者の社会関係の構築」を記述し明らみに出すことは、「告発」という相のもとで受け取られる危険をはらんでいるということを論じた。

4. 報告書

本コロキウムは、人類学と霊長類学という、フィールドワークに根差した両分野によるクロストークを通して、「社会性」をキーワードとした学際的な研究を推進することを趣旨として企画された。日本学術振興会科学研究費補助金基盤(S)「社会性の起原と進化：人類学と霊長類学の協働に基づく人類進化理論の新開拓」とフィールドサイエンス・コロキウム、AA研基幹研究(人類学)の共催として企画され、フィールド調査を精力的におこなっている、若手人類学研究者2名による報告に続き、霊長類学の立場から、それぞれの報告に対しコメントがなされた。

第一報告「ともに独りで歩くこと：北方アサバスカンの社会性と自律性」で、近藤祉秋(北海道大学)は、マルチ・スピーシーズの論点に立ち、アラスカ先住民社会における、人同士の社会性だけでなく、人と動物の間の社会性について、現地での参与活動をもとに報告した。近藤は、狩猟活動を「狩猟者と獲物の一回的な関係」ととらえる従来の視点を脱却し、獲物以外の生き物とのかかわりを視野に入れた「社会性」を論じる必要性や、調査者を含めた人々の身体動作を考慮して分析することの意義を提言した。

第二報告「観測する科学者を観測する：「ヒトを見ないようにヒトを見ること」と「サルを見るようにヒトを見る」こと」で、森下翔(大阪大学)は、科学者共同体の観察を通して、積極的な関係構築が見られながら、それを目的とせず「ひとりでものを考える」ことを標榜する科学者の奇妙な存在様式を論じた。そして、人類学者によるこのような記述が、科学者にとっては「告発」とも受け止められかねないものであることを報告した。

最後に、コメントとして、霊長類研究者の黒田末寿(滋賀県立大学)と上野将敬(大阪大学)から、両発表に対して、霊長類学や生態人類学との類似性を指摘しながら、両発表における視座の意義と発展可能性について言及がなされた。また、無人カメラを導入した観察方法を導入する等、フィールド調査において調査者の影響を除こうとする、霊長類学の視点に立った人類学的調査の可能性について提起がなされ、活発な議論が行われた。